

会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和5年度 第2回キャリア教育推進委員会		
事務局 (担当課)	学校教育課 電話042-769-8284(直通)		
開催日時	令和6年1月24日(水) 15:00~17:00 令和6年2月29日(木) 10:00~11:00 (藤田委員オンライン会議)		
開催場所	ウェルネスさがみはら 7階 視聴覚室		
出席者	委員	19人(別紙のとおり)	
	その他	1人	
	事務局	9人 学校教育課 5人 教育センター 4人	
公開の可否	可 不可 一部不可	傍聴者数	2人
議題	<p>1 確認事項</p> <p>(1) 令和5年度のキャリア教育推進について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和5年度の重点的な取組について ・縦の接続(PDCAサイクルの推進等)について ・横の連携(学校、地域、関係機関との連携)について <p>(2) 令和6年度のキャリア教育推進の方向性について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度キャリア教育推進の方向性について <p>2 協議</p> <p>(1) 「本市の子どもたちが、将来の生き方を考え、豊かな人生をおくるために、何ができるか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校、地域、関係機関の連携について 		

議 事 の 要 旨

[議事内容、質問及び主な意見] 委員 ○事務局

令和6年1月24日(水)相模原市キャリア教育推進委員会

1 開会

(1) 学校教育部長あいさつ

本市では第二次相模原市教育振興計画において「共に認め合い、現在と未来を創る人」を目指す人間像としており、三つの基本姿勢のもとで、教育施策を展開している。今後も、キャリア教育で身に付けさせたい「つながる力」「自律する力」「乗り越える力」「見通す力」のもと、チーム相模原で、本市の子どもたちが夢と生きがいをもって、豊かな人生を送るために何ができるかという思いを共有しながら、教育活動を充実、改善させていきたい。

今回の推進委員会では、令和5年度の取組の報告と共に、令和6年度のキャリア教育の推進の方向性について、本日お集まりいただいた関係団体、関係各課の推進員の皆様からご意見をいただく中で、令和6年度における本市のキャリア教育の推進を、さらに充実した取組にしていきたい。

(原委員)

- ・今回の箱根駅伝において、学生の無限大の力・プラスアルファの力を感じることができた。
- ・「負けてたまるか大作戦」というスローガンのもと駅伝に臨んだが、ライバルチームに勝つという側面だけでなく、自分自身に負けず、己に勝つというメッセージも込められている。
- ・スポーツにおいて勝ち負けはついてしまうものであるが、自己と戦っている姿があれば、それを評価すべきであると考えます。教育においても、同じことが言えるのではないかと思います。
- ・引き続き、微力ながら相模原市の教育に関わっていきたい。

2 提案

(1) 令和5年度のキャリア教育推進について

○「資料1-1」について、事務局から説明

「何が身に付いたかアウトカム評価によるPDCAサイクルの推進」等について

「資料2-1」

(清水委員)

- ・中野中学校では、全職員で共通理解を図ることを重要視している。
- ・子どもの変容が見える化できるように、子どもの振り返りなどを活用し、授業改善に生かしている。
- ・GIGAスクールに関する研究実践も進めており、横浜国立大学から講師を招いて研修会を実施するなど、授業改善に向けて職員が一丸となって学ぶ姿がある。

「コミュニティ・スクールを核とした地域、関係機関との連携」等について

「資料2-2」

(内村委員)

- ・「あいあーるラウンジ」については、不登校や困り感を抱える生徒の居場所づくりのため取り組んでいる。
- ・現在、約15人の生徒が利用している。
- ・1日利用する生徒もいれば、給食前に下校する生徒もいる。午後の1時間程度利用する生徒もいる。様々な利用の仕方がある。
- ・生徒をはじめ保護者にも、生徒の居場所として認識されている。
- ・今年度PTAの家庭教育事業として、大学生に「あいあーるラウンジ」を見学してもらった。
- ・今後は、短い時間でもいいので、そういった学生たちの力も借りながら取組を続けていきたい。
- ・利用している生徒は繊細な生徒も多く、すぐに充実した関わりができるわけではないと思うが、これからも、大学との連携を密にして、見学者等を多くしていきたい。

「小・中校長会との連携」等について

「資料2 - 3」「参考資料1」

(神原委員)

- ・小学校長会の中では、教育課程研究部という、キャリア教育に特化して研究を進めている研究会がある。
- ・その研究部会において、キャリア教育を推進するためにはどういった取組を進めていけばよいかを、アンケートを基に検討した。
- ・その中で見えてきた課題から、今年度の重点目標を決めて実践を進めてきた。
- ・多くの学校で、キャリア教育を学校教育目標やグランドデザインに位置付けていることが分かったが、校長自身が自分の学校のキャリア教育の推進状況を、どうやって捉えていけばよいかについて、疑問に感じていた。
- ・そこで、校長もキャリア教育について研修をしていく必要があると考え、横浜国立大学から講師を招いて授業参観や講義を実施し、キャリア教育の視点に基づいた授業づくりについて理解を深められるようにした。
- ・教育委員会からも多くの情報提供をもらい、校長と教育委員会が感じている課題について重なる部分が多くあると感じている。
- ・PDCA サイクルについては、実際にできているのか、というところになってくると、非常に学校間に差があるということが見えてきた。
- ・キャリア教育推進委員会についても、何らかの形で小学校長会教育課程研究部会が関わるような取組ができていくと、さらにその横の連携が強まっていくのではないかと。

「キャリア・パスポートの活用事例」等について

「参考資料4」「参考資料5」

(奥津委員)

- ・鳥屋学園では、小学校1年生から中学校3年生までの9年間で小中の教職員で取り組む縦の接続の研究を、鶴野森中学校区では、地域関係機関と連携して行う横の連携の研究を、それぞれ令和2年度から4年間にわたる研究を実践してきた。
- ・いずれの学校も、めざす子ども像を設定している。この子ども像は、目の前にいる児童生徒の実態を協議し作り上げてきたもので、縦の接続では「自分の考えを持って発信できる子」と設定され、横の連携では「目指す15歳の子ども像」として設定されている。
- ・めざす子ども像は、児童生徒とも丁寧に共有し、身近な大人は、めざす子ども像を意識して、日常的に子どもと関わっている。
- ・児童生徒は、日常生活における成功も失敗も含めて、定期的に自分自身のことを振り返る機会を設けている。この振り返りのツールがキャリア・パスポートである。
- ・キャリア・パスポートというワークシートをツールとして、児童生徒は自己理解を深め、周囲の大人は対話的に子どもたち1人ひとりと関わり、自己肯定感の向上につなげている。
- ・2つの研究で得られた成果については、それぞれ研究発表会を開催し、市内外の教職員等に周知した。次年度以降も他の中学校区において研究を継続する予定で、現在調整中である。

○「資料1 - 2」について、事務局から説明

「8 消費者生活出前講座等」について

(菊地原委員)

- ・消費生活相談員を講師として各学校に派遣し、出前講座を開催している。
- ・出前講座を通して、子どもたちによるインターネットを活用したゲーム等への高額な課金の問題や、インターネット通販に係る問題等について伝えている。
- ・消費生活総合センターにおいても「自律する消費者」というキーワードを使用している。キャリア教育における「自律する力」を身に付け、将来トラブル等に巻き込まれないようにできればと思っている。
- ・講座については、学校からの希望が特定の期間に集中して、希望に添えない状況もある。カリキュラムの関係もあると思うが、可能な限り調整してもらえれば多くの学校で講座を開催することができると思う。

「 9 障害者への理解を進める取組」について

(沼田委員)

- ・高齢・障害者福祉課では「心の輪を広げる体験作文・障害者週間ポスター」の募集を通して、応募者が障害について考え、表現する機会を設け、障害等への理解促進をめざしている。
- ・障害者週間のつどいでは、第一部で「心の輪を広げる体験作文及び障害者週間ポスター」の入賞者の表彰式を行い、第二部には障害の理解を進めるような映画を上映した。
- ・各学校においても、こういった各事業について周知していただき、障害者理解をより進めていきたいと考えている。

「支援教育の視点」として

(村山委員)

- ・松ヶ丘園では、障害者一次ケア事業として、ご家族の用事などにおいて、一時的に障害児の方をマンツーマンでケアする事業を実施している。
- ・特に、土日や夏休み、冬休みなどの期間では、小中学生を中心に、障害のある方が多く利用している。淵野辺公園を散歩したり、買い物をしたり、学校や家庭とは少し違う過ごし方をしている。
- ・けやき体育館において、共生社会を意識した取組として、障害があるなしに関わらず参加できるパラスポーツ体験会を行っている。車椅子バスケットボール、車椅子テニス、カローリング、ボッチャ、卓球、バドミントンなど、障害のある児童とない児童が共に楽しむイベントを行っている。
- ・スポーツ以外にも、文化的な活動として「科学のビックリ箱」と称し、小学生を中心に、トヨタ自動車のご協力を得て、ソーラーカーを作る体験などを行った。障害のある方、ない方が一緒に楽しく学べる場となり、近隣の小学校や児童クラブにチラシ等で周知をし、参加してもらった。
- ・今後は、近隣でなくとも市内の多くの児童にも参加してもらいたい。興味があれば、けやき体育館のホームページなどをご覧になり、参加していただけたらと思っている。
- ・共生社会の実現に向けて「自律」というところにも繋がっていくのではと捉えている。次年度も引き続き、同様の取組を実施していきたい。

「 10 子どもの居場所づくり」について

(馬渡委員)

- ・子どもの居場所創設サポート事業の無料学習支援や、子ども食堂の取組について、こども・若者支援課が担当している。
- ・それらの事業を市の社会福祉協議会に委託し、団体が活動しやすい環境づくりや新規立ち上げ等の相談を受け付けるような総合相談窓口などを設置して、現在活動している団体、新たに活動を始める団体の連携の強化に努めている。
- ・現状としては、令和6年1月現在、子ども食堂で活動しているところは51団体。無料学習支援は39団体、活動していただいている。
- ・活動の担い手として、大学生に期待している。学生向けのボランティアセミナーを開催したりして周知を図っている。大学生ということで、子どもたちとも歳も近く、地域の中で新たな繋がりができることも期待しているところである。

「 11 企業との連携」について

(草薙委員)

- ・さがみはら子どもアントレプレナー体験事業について、小学校5・6年生を対象として、将来、産業を支える人材育成を図ることを目的としている。会社を起こすところから、原材料の仕入れや商品製造・販売、経済の流れ、仕組みを疑似体験する事業である。
- ・事業後のアンケートに、保護者からは「未来の起業家の人材育成、日本経済の発展の観点から、そのような事業が必要である。」という回答や「子どもが仕事や会社で働くことに興味を持てるようになった。」という回答があった。子どもからは「将来、会社を経営してみたい。」という回答が約9割であった。

- ・キャリア教育の視点において、学ぶことが将来や実生活につながるというところに届く取組といえるのでは、と考えている。

「青年会議所が行っている事業を通して、子どもたちに育てたい力など」について

「参考資料2」

(村上前委員)

- ・9月23日に「オータムグルメフェス2023」と称し、子どもたちが考えたメニューだけを販売するお祭りを開催した。
- ・地域のお店と協力して、一か月前からメニューを考え、実際に販売するイベントで、参加した子どもたちは、当日も料理を作る手伝いや、接客の手伝いを行った。
- ・それだけでなく、ステージでは、子どもたちがそのメニューを考えた経緯とか、こういったところが美味しいポイントなのかを、皆様の前で発表をしたりした。
- ・職業体験に関するアンケートを実施し「どのような職業なら体験してみたいか。」を聞いた。その中から、実際に青年会議所にお呼びしてイベントを開催した。弁護士、学校の先生、大工、アナウンサー、ファッションモデル、カメラマン等の方々に参加していただいた。
- ・子どもたちが将来就きたいと思えるような、きっかけになればいいなと思い開催した。また、その職業を体験するだけでなく、その職業に就くにはどうしたらよいのかを、実際に子どもたちに伝えることができたイベントになったと思う。
- ・どちらの事業も子どもたちが主体となって開催したイベントであり、今後も継続してより充実したものにしていきたい。

「12 家庭教育」について

(松本委員)

- ・相模原市PTA連絡協議会に委託して、家庭教育講演会を実施していただいている。市内11ブロックの各地区において、家庭教育に関する講座やセミナーを実施していただいている。
- ・公民館では、家庭教育を地域課題として捉え、家庭教育をテーマにした様々な事業を実施した。
- ・様々な立場の方を講師として招き、講演や講座を開催し、保護者同士の話し合いの場となり、情報交換の場として機能していると思う。

「PTA連絡協議会での取組」について

(中村委員)

- ・11のブロックに分かれ、家庭教育事業として、講演会などを実施している。
- ・コロナ禍が明けて、実施できない時期もあったが、現在開催ができるようになってきたということについて、まずは良かったなという風に思っている。
- ・一方で、日程的に色々な地域のイベントと重なる機会もあり、参加者がうまく集められないということも、課題としてある。地域の公民館のお祭りや講演会と重なるケース等、そのあたりを次年度は地域との繋がりの中で調整できればと思っている。
- ・子どもたちは、学校、家庭、地域の中で育っていると思う。キャリアを踏まえて子どもたちを育てていくには、学校だけでも、家庭だけでも、地域だけでも難しい。
- ・その中で、保護者がどういう状況なのかということが課題としてあり、保護者が子育てについてもう少し学んでいく必要があると思う。
- ・子どもたちがキャリア教育について理解を深めていくためには、保護者もキャリア教育について理解を深めていく必要があると感じる。
- ・今後も皆様からご意見をもらいながら、横の連携を図っていきたいと考えている。

「職場体験支援事業」について

「資料3」

(布施委員)

- ・職場体験に関して、毎月発行している会報の4月号で中小規模の事業者にも周知している。記事にすることで、申し込みが増加したと伺った。
- ・掲載時期なども連携することができれば、もっと効果的ではないかと感じる。
- ・今後は、実際に取り組んだ事業者の事例等も掲載できるとよいのではと思っている。

「法人会の取組」について

(鎌倉委員)

- ・商工会議所と連動して同じように取り組んでいる。11月に会報誌において職場体験に関する募集案内を掲載している。今後も適時案内を出していきたいと考えている。
- ・職場体験に関する会議等へ出席し、現在の色々な問題点等も伺った。法人会としてできることは何か考えた際、登録企業のばらつきを解消できないか検討しているところである。
- ・今後は、案内を掲載するだけでは、受け身になってしまうので、個別にアプローチして登録してもらうなど、法人会として動いていきたい。

「公共職業安定所の取組」について

(岡本委員)

- ・「発達に課題がある児童生徒の職業自立のための保護者セミナー」を昨年度に引き続き、産業会館で12月14日に開催した。当初80名を見込んでいたが、92名の参加があった。うち保護者が70名であった。
- ・昨年との大きな違いは、特別支援学級の保護者の方が多かったが、今年は、普通の地域の公立学校の保護者の参加も多かった。
- ・内容については、キャリアと支援に関連して、教育から就労まで、切れ目のない一貫した流れの支援に関することを扱った。保護者に一番伝えたいことは「自分で選択できる力」について、できる限り小学生の頃から身に付けてほしいということだった。そういったことを保護者の気持ちに寄り添いながら伝えていきたいと思ってこのセミナーを開催した。
- ・次年度も開催したいと考えており、内容等については検討中である。

「中野中学校生徒によるスピーチ」について

(約3分の映像を視聴)

(清水委員)

- ・将来の夢を子どもたちに語ってもらおうとすると、中々イメージできない。そうではなくて「なりたい自分」というテーマで語ったらどうかという取組である。
- ・始業式、終業式において「なりたい自分」をテーマにスピーチをしてもらっている。それを中野中学校だけでなく、中野小学校も津久井中央小学校も実施している。それを映像として残して、学校間でも共有できるようにしている。職員だけでなく子どもたちもその映像を共有し、それを基に話し合ったりしている。小学生が中学生の語る姿を見て、憧れや尊敬の気持ちをもってもらえたらよいと思っている。
- ・このスピーチに関するテーマは子どもたちが決めている。この映像については、保護者も視聴したようで、映像を見て本当に感動したという感想をもらっている。

(中村委員)

- ・中学校を卒業したら就職する生徒は少ないのではと思う。そう考えたときに、小学校低学年だったら高学年、小学校高学年であれば中学生、中学生であれば高校生、というように、身近な連携、繋がりができた方がいいのではと感じた。
- ・そこで、市内の高等学校や大学とこの推進委員会が連携していけば、キャリア教育はより推進していくのではと感じる。
- ・企業との連携だけでなく、高校、大学とも連携をすることで、子どもたちが具体的な目標をもちやすく、キャリア教育の推進に繋がっていくのではと思う。
- ・県内でも不登校や自死等の件数が増えている。相模原もそういった問題に直面しており、より中高連携という視点があれば、こういったことも防ぐことができるのではと思う。
- ・学校現場に先生がいないという実感を持っている。もし災害が起きたらどうなるか等、職員室に先生がいないという現状について不安を感じる。人材をどう増やしていくかは基本であり、キャリア教育を支える大切な要素だと思う。

(2) 令和6年度のキャリア教育推進の方向性について

○「資料4」について、事務局から説明

3 協議

「本市の子どもたちが、夢や生きがいをもって豊かな人生を送るために、何ができるか」

○「資料5」について、事務局より説明

(清水委員)

- ・中野中学校で一番大切にすることは、小中連携であり、小学校と中学校が手を結んで色々な取組を進めてきた。子どもたちが学校で学んでいると、自信をもって言える。
- ・学力については、10年前とあまり変わっていない。何を学力とするのかも時代によって変わるものだと思うが、小学校、中学校含めて定着していないのではないかと思う。
- ・不登校の人数も減っているかという、そうではない。そういったこともきちんと考えていかないといけない。
- ・ただ、学校が大きく変化している。今日提示のあった職場体験など、多くの活動に取り組めるようになってきた。色々な取組をすれば、いい方向性であるとか、その取組に子どもたちが感動したとか、語られる。しかしながら、それで子どもたちがどう変わったか、という視点をもっともつべきではないかと感じる。
- ・「参考資料6」を見ると、朝食を毎日食べる児童生徒の割合が低い傾向にあり、睡眠時間が8時間以上と回答した児童生徒の割合も低い傾向にある。その反面、スクリーンタイム(スマホやテレビ等を見る時間)は全国に比べて割合が高い。
- ・家庭だけでなく、学校としても1日の生活について子どもたちに考えさせ、見直すよう促すことも大事なのだろうと考える。
- ・原委員が時間に関することを、普段から陸上部の学生に指導されているとお聞きした。走るという単純な競技であるが、そういった地道な自己管理が大きな成果につながることに自信をもって発信しているのだと思う。青山学院大学は3時間しか練習をしないそうで、残りの21時間をどう過ごすのかを大事にされているということだと感じる。
- ・中村委員もおっしゃっていたが、学校教育と家庭教育が子どもたちの1日をどう見守っていくか、さらにそれを支える地域の方々も含めて、子どもたちを共に育てていくという意識が大切だと思う。そのために、キャリア教育は非常に大切なことであると感じる。
- ・それぞれの機関の話を聞いて、横の連携がより推進していくとよいと思う。
- ・先ほどのスクリーンタイムが課題でありながら、ICTの活用は推進していくのが現実としてある。そういったものと、どう付き合っていくのかも含めて考えていかなくてはならないと思う。

(菊地原委員)

- ・消費生活センターからの発信を繰り返し実施していくことによって、子どもたちに有害性とか、危険性とかを徐々に伝えていくということが、大切なのではないかと思う。

(山口委員)

- ・まだ構築段階ではあるが、つながる力や、自立する力、考える力、思いやりの心など、そういったところを育むために、中学生に議員になってもらおうという事業をしたいと考えている。
- ・実際に本会議場等で提言書を提出し、地域の在り方について考えるという活動を検討している。
- ・また、保護者目線の話ではあるが、子どもが夢や希望を持ってほしいという気持ちである。
- ・職場体験を通じて、全ての子どもを取り残さず、一人残さずにみんなで共有して取り組んでいきたいと思う。

(事務局)

- ・教育委員会として、各中学校区の担当指導主事が子どもたちを対象に「生活改善出前講座」を実施している。希望があった学校において、学習状況調査等の分析を基に、朝食や睡眠時間と学力との関係について伝えている。

(中村委員)

- ・校長先生方にお聞きしたい。どういったことを保護者や地域、行政が進めていけばよいのか、ご意見を伺いたい。

(清水委員)

- ・職場体験等、様々な体験をしたら、その体験で子どもたちはその瞬間は感動する。人間はそういうものだと思う。勉強の場面においても、何かの問題について「できた」となることはある。
- ・今日も提示していただいた、たくさんのプログラムにおいても、感動した、感激したという瞬間的なものに終わらせず、定着させることが大切だと思う。
- ・先ほどの映像の生徒の事例もそうで、定着しているから、持続している。様々な体験をして、次に繋がらなかったら、参加したことも忘れてしまうのではないか。
- ・学んだことを家庭や地域にも繋げていくことが大切であり、それが本当のキャリア教育なのではないかと思う。そういった力を身に付けていくことがキャリア教育にとって大事であり、学校と家庭、地域とで一緒にやっていかななくてはいけないことではないかと思う。
- ・10年後、20年後の未来のために、学びを定着させるということをやっけていかななくてはならない。今の子どもたちの現状に危機感をもっている。

(内村委員)

- ・「参考資料6」を見て、子どもたちを育てるのに大切なことは、安定した生活習慣しかないだろうとを感じる。教員になって、こうして管理職になってもそのことは感じる。
- ・「早寝早起き朝ごはん」とよく言われてきたが、現在はヤングケアラーや、孤食の問題等もあり、3つの条件を満たすということが難しくなっていることもある。それでも「早寝早起き朝ごはん」だと思う。
- ・不登校に関しても、睡眠時間にその兆候が表れ、生活習慣が乱れていく中で遅刻がちになったり、学校に行けなくなったりしている状況もある。
- ・学力に関しては、個別最適化というキーワードが発信されているが、私は読書が大切だと感じている。本が読める子ども、本が好きな子どもは、そこから得た知識だけでなく、発想力も豊かになり、読書力が学力に繋がると思う。
- ・色々な学校で朝読書の活動が無くなっているが、本校では、5分でも10分でも本を読むきっかけを保障してあげたいと思い、次年度も続けていこうと思っている。
- ・以前、非常に学力の高い子どもたちを担当したことがある。その子どもたちが小学校1年生の頃、親子で日本昔話を文章にするという課題に取り組んでいた。おそらくその子どもたちは、日本昔話からテレビなどの映像でなく、本に興味や関心を移していったのだろうと思う。

(神原委員)

- ・津久井中央小学校のPTAの活動として「ブックトーク」を企画している。毎回講師の方に10冊以上の本を紹介してもらっているが、結末をあえて言わずに、興味を持たせて終わるという形式で開催している。それが発展して、子どもたちでグループを作って「ブックトーク」を開催するに至っている。
- ・子どもたちは、どうすれば聞き手が読みたいと思えるか考えながらトークを展開している。津久井中央小学校では、自分の意見を表出することに価値を置き、聞き方や話し方などに着目して子どもたちを指導している。それを中学校区で取り組んでいる。
- ・そこで自分の考えを表出できるということが、子どもたちの自己有用感を高めることに繋がっている。その自己有用感の高まりによって、子どもたちが活気づいていると感じる。
- ・「参考資料1」について、相模原出身のアーティストである大橋美沙さんの絵画を展示する美術館を市内の小中学校で巡回している。
- ・言葉では表現できないがアートなら自由だ、というのが彼女の口癖である。子どもたちの表現は、多様で、ツールも様々であると思う。言葉だけでなく、音楽で表現したり、絵で表現したり、パソコンなどのICTを使ったら表現できるなど、一人ひとりの可能性は多様であり、それを見出すことが大切である。
- ・そうなるべくと、学校の先生だけの関わりだけでなく、横の連携がとても重要で、子どもたち

が選択する幅が広がっていくと思う。

（清水委員）

- ・会話の力が重要になってくる。大人も子どももスマートフォンを持ち、インターネットの世界にのめり込んでいる。子どもが外で何を体験したのか等を親として知っているのか。会話の力を高めていく必要性を感じる。

（中村委員）

- ・協議題である、将来の生き方を考える、豊かな人生を送るために何ができるかということについては、家庭が大切なのだと思う。安定した生活習慣を身に付けるという点では、他の家庭がどのような状況が多分分からない。分からないまま大人になっていくのだろうと思う。今後は、保護者同士の繋がりの中で、各種事業等で生活習慣について考えるきっかけづくりをしていきたい。
- ・将来の生き方については、様々な生き方があるということを知るきっかけの場を講演会等で作り出していきたい。職場体験については、豊かな人生を考えるうえで改めて重要だと感じた。
- ・読書については、家庭で保護者が読んでいけば子どもも読むのだろうと思う。学校の中で本に触れる機会が無くなってしまうと、読書をしなくなってしまうということもあるのではと感じた。読み聞かせをきっかけに娘が本を好きになった。本を好きになるきっかけを与えてもらっている、ということも言えるのではないか。

（岡本委員）

- ・普段は大学生の就職の支援をしている。その中で、コミュニケーションについて苦手意識をもっている子どもたちが増えてきていると感じる。言葉だけでなくジェスチャーを交えながら思いを伝えたり、聞く側の姿勢についてもセミナーを通して伝えたりしている。
- ・以前、就職セミナーをオンラインで開催した際、自己PRを求めたら、自分の描いた絵を提示されたことがあった。このような表現もあるのだとその学生から学んだ。今回の表現についての話を聞いて、そのときのことを思い出した。

（農上委員）

- ・原委員より無限の力について話があった。改めて、子どもたちの力を信じて取り組んでいくことの大切さを感じた。また、神原委員の話においても、子ども一人ひとりの可能性を引き出していくことの大切さを今日の協議の中で、考えさせられた。さらに「負けてたまるか大作戦」における2つのねらいについて、改めてお聞きすることができた。外向きの発信と学生たちの内面に向けて発せられた言葉によって、学生たちが鼓舞されたのだと知ることができた。
- ・縦の接続については、キャリア教育が進めば進むほど、共通理解をして取り組むことの大切さを感じた。また、キャリア教育に対する理解、学びをより深めていき、リーダーシップを発揮することの大切さや実践事例等を発信することの大切さを実感し、教育委員会としても改めて主体的に関わっていかうと胸に刻んだ。
- ・横の連携については、それぞれの関係機関が様々な講座や体験活動、支援活動の取組等、本当に幅広い取組を紹介していただいた。キャリア教育の、身に付けさせたい4つの力を意識して、関係機関も取り組んでいただいていることに、改めて、嬉しく思う。感謝申し上げたい。それぞれのお立場で何ができるだろうと考えてくださっていることを、私たちも力強く感じたので、これからも一緒に取り組んでいただければよいお願いしたい。
- ・第1回推進委員会で、藤田委員の方から、相模原市はキャリア教育の先進自治体である というお言葉をいただいた。それぞれの学校や関係機関が、先ほどお話があったように様々な取組をしていただいていることが、藤田委員からのこういった評価になったものと捉えている。教育委員会としては、その評価に嬉しさもあるが、今後も一歩一歩謙虚に丁寧に取組を進めていく必要があると考えている。
- ・本市のキャリア教育推進の手引きというものがあり、キャリア教育に期待される効果として大きく3点掲げている。
- ・1つ目は、一貫性のある指導、支援やカリキュラム・マネジメント整備などの指導観の整備を図っていけるということ。2つ目は、児童生徒の自己肯定感の向上や社会的視野の広がりなど、子どもの変容が期待されること。3つ目は、学力向上、生活習慣の改善。キャリア教育を進めていくにあたっては、私たち教育委員会としましても、この3つの視点を検証し、振り返りを怠るこ

となく、行っていく必要があると考えている。

- ・本日、委員の皆様からいただいたご意見を持ち帰り、教育局全体で共有し、また、市長部局の方にも、共有を図っていきたいと考えている。そして、地域、保護者、関係団体の皆様にも、さらなるご理解、ご支援をいただきながら、今後もキャリア教育を推進していきたい。

4 その他

- ・次年度の日程は、第1回を5月下旬、第2回を2月上旬の実施予定。

令和6年2月29日(木) 藤田委員とのオンライン会議

1 提案

(1) 令和5年度のキャリア教育推進について

○「資料1-1」について、事務局から説明 (藤田委員)

- ・先生方がこれまで継続的に積み重ねてきたことがだんだん形に現れてきている。また、各校で工夫して取り組んでいる先進事例をきちんと紹介していることを心強く、先生方の努力が実ていることを感じる。特に資料2-1のGoogleフォーム、GIGAスクール構想で1人1台の端末の環境が整った中で、ICT環境を使いこなしながら、先生方や子どもたちの負担を減らし、視覚的に整理できる利点を生かしていることは大切である。

- ・資料2-3では、横浜国立大学の高木先生が指導されているカリキュラム・マネジメントの評価の内容について書かれている。学校教育目標やグランドデザインの中で、キャリア教育で身に付けさせたい力を明確にしなから、学校経営に取り組むことは大変重要である。

現場の先生から見ると、カリキュラム・マネジメントもキャリア教育もやらなければならない。SDGS、道徳教育もやらなければならないなど負担感を感じている先生がいるかもしれないと思うが、例えば、道徳教育で求められている「自分自身に関すること」はキャリア教育で言えば「自己理解、自己管理能力」と重なる。自分を理解するということはこれから自分の将来を展望するということと重なる。横並びでなく、重層的に重なり、それがカリキュラム・マネジメントに最終的には統合されていくと理解することが大切である。学校現場の先生方の疲弊感の軽減につながると良いと思う。働き方改革の中で先生方の負担を軽くしようという流れは必要なことであり、先生の負担が過度にならないよう、できる限り役割分担をしていく流れも当然である。けれども、子どもたちに身に付けさせたい資質をきちんと設定し、教育活動全体を通して、身に付けさせたい力を培っていくことは教員しかできない。そこに疲弊感を感じると、教員の根幹を否定してしまうことになる。働き方改革という大きな目標があるが、本来の中核的業務までも軽減化、軽量化する流れができてしまうことは違う。先生方の心理的な負担感を軽減し、本筋的にやらなければならないことを先生方がきちんとやり遂げることを応援していくことが大切だと感じる。

- ・PDCAサイクルを正しく回すためには具体的な身に付けさせたい力を設定することが大切である。参考資料3を例に話すと、「深く考える人 思いや考えを行動する人 自分に負けない人」という目指す子どもの姿が設定されている。これは方向性やスローガン、心がけである。身に付けさせたい力は具体的にどういうことができるようになったかである。PDCAサイクルがきちんと回ることが根幹にななければならない。例えば「自分に負けないことができましたか。」と聞いたときに、自分に負けないとはどういったことかわかりづらいのではないかと。また「深く考えることができましたか。」は主観的な考え方に偏った評価になってしまう恐れがある。身に付けさせたい力が設定されていると、PDCAサイクルがきちんと回り、子どもも自覚的に自分の成長が見てとれる。保護者も行動や言動に現れる形で身に付けさせたい力が見てとれる。スローガンや方向性を身に付けさせたい力と言ってしまうとPDCAサイクルは回らない。相模原市として目指す子どもの姿や身に付けさせたい力とはどのようなものが整理しておく、誤解なく議論ができる。

○「資料1-2」について、事務局から説明

(藤田委員)

- ・資料3の職場体験支援事業について、協力事業所が昨年度より60%増加したとある。コロナ前の状況にすぐには戻らないと思うが、増加傾向にあることは大変良いこと。オンラインを通じた探索的な活動はできるが、その場に行かなければわからない雰囲気、におい、音、ドアの重さ、電話がなったときの職場の雰囲気が変わる瞬間を体験するなど、行かないとわからないことがある。オンラインで代替できるものはあるが、代替できないことのほうが多い。このように協力事業所の数が回復していることは相模原の努力である。
また、やりっぱなしでなく、PDCAをまわしながら、子どもたちの成長をみんなで見守っていることも心強い。これまでの蓄積が実っている。

(2) 令和6年度のキャリア教育推進の方向性について

○「資料4」について、事務局から説明

3 協議

「本市の子どもたちが、夢や生きがいをもって豊かな人生を送るために、何ができるか」

○「資料5」について、事務局より説明

(藤田委員)

- ・資料4で提案されたことと協議題にある今後何ができるかの重複点について申し上げる。資料4の重点1の何が身についたか評価をしている学校の割合が成果としてある。PDCAサイクルを回すということは、身に付けさせたい力の育成に向け実践し、それがどのくらい身についたかを評価すること。身に付けさせたい力が設定されていることが前提である。さらに、身に付けさせたい力を保護者・地域にどれだけ理解されているかが重要である。
スローガンや方向性だけを周知するのではなく、具体的に見てとれる力、具体的に行動として表れる力を保護者・地域と共有してこそみんなで子どもの成長が見てとれる。学年で設定されている具体的な身に付けさせたい力を保護者に周知すると、家庭でも子どもを褒めることができる。漠然としていてどこで褒めてよいかわからないスローガンや方向性でなく、例えば「やらなければならないことがあったときに、苦手なことでも最後まで取り組むことができる」と具体化すると夏休みの宿題への子どもの取組を家庭でも褒めることができる。具体的な身に付けさせたい力を共有することは、家庭の教育力を上げることへつながる。具体的に行動として表れる力を子どもは褒められて嬉しく、保護者も褒めることができて嬉しい。だから、学年の身に付けさせたい力を保護者と共有することが大切である。
- ・職場体験についても同様で、中学校2年生で身に付けさせたい力の中で職場体験を通して特に身に付けさせたい力を事業所と共有されていると、生徒の成長を先生が褒めることができる。職場体験をお願いするときにも、キャリア教育で身に付けさせたい力に向けた教育活動の中で、学校でフォローできないことを事業所をお願いすると、仲間に入ってもらえる。また、保護者・地域も当事者意識を持ち子どもを見守るためには、ゴール(具体的な身に付けさせたい力)を共有することが大切である。具体的な力を学校が設定し、地域・保護者と共有することができれば、来年度の重点1と重点2が推進される。
- ・子どもたちはVUCAの時代、先の見通しがつかない変化が著しい社会の真っ只中にあり、将来への不安感が強い。しかし、その中でも地域の中で事業を営んでいる人、働いている人の中には不安感を払拭するだけのエネルギーをもち、先を見通して頑張っている大人がいる。子どもたちは、その方たちと接点をいかに持つ機会を得るかが重要である。世論調査結果の中に、学校以外の幅広い人材を活用した講話とある。資料5にあるように「学んでいることと実生活・将来とのつながり」は、特に中学生にとって必要である。受験、期末テストが学ぶ目的にならず、学んでいることと実生活・将来とのつながりについて授業を通して伝えたい。その時にICT端末が活用できる。例えば工場で働いている人、商店を営んでいる人などの学校以外の幅広い人材を活用した講話として、1分動画を作成することを教育委員会で考えてもよい。単元の中で学んだことが大人になって生きることを伝えることで、今回の単元の学びが将来につながるというメッセージが子どもたちに伝わる。現場の先生の言葉を拾い、単元に焦点をあてて、1分動画のメッセージを募集してもよいと思う。

令和5年度 第2回相模原市キャリア教育推進委員会

氏 名	所 属 役 職 等	出 欠
藤田 晃之	筑波大学人間系教授・教育学類長	オンライン出席
原 晋	青山学院大学地球社会共生学部 教授	オンライン出席
村山 毅	社会福祉事業団 障害者支援センター松が丘園	出席
布施 昭愛	相模原商工会議所	出席
鎌倉 慎一郎	公益社団法人 相模原法人会	出席
山口 堅一郎	公益社団法人 相模原青年会議所	出席
村上 翔一	公益社団法人 相模原青年会議所	出席
岡本 愛子	相模原公共職業安定所	出席
中村 岳彦	相模原市P T A連絡協議会	出席
神原 由香里	相模原市立小学校長会	出席
内村 昭広	相模原市立中学校長会	出席
清水 俊次	相模原市立中学校長会	出席
農上 勝也	学校教育部長	出席
菊地原 央	区政推進課長	出席
沼田 好明	高齢・障害者福祉課長	出席
馬渡 加能	こども・若者政策課長	出席
草薙 格	産業支援課長	出席
岩崎 雅人	教育総務室長	出席
三谷 将史	学校教育課長	出席
奥津 光郎	教育センター所長	出席
松本 隆人	生涯学習課長	出席